

# 現代台湾宗教參觀記

寺 尾 英 智

平成十九年八月一日（水）から四日（土）まで、鎌倉仏教研究会に参加し、台湾における仏教を中心とした諸宗教事情を視察する機会に恵まれた。同研究会は、立正大学名誉教授中尾堯氏を囲む日本仏教の若手研究者の交流の場として発足し、毎年夏期に宗教に関わる史跡の巡検を行ってきた。小規模ながら、三十年近い歴史がある。

今年は、台湾や中国本土で仏教寺院を中心にフィールドワークを重ね、現地に明るい愛知学院大学の養輪顕量氏の企画である。日本仏教のルーツであった中国の仏教について、本土から台湾へと伝わった現代の台湾仏教を体験すると共に、台湾の歴史的な文物を見学するという。参加者は、中尾・養輪両氏の他に、大石雅章（鳴門教育

大学）・馬田綾子（梅花女子大学）・原田正俊（関西大学）・曾根原理（東北大学）・石田智宏（興隆学林専門学校）・菊地大樹（東京大学）の諸氏に筆者を含め、総勢九名となった。何れも見知った顔ばかりである。

八月一日 関東方面からの参加者は、成田空港から午前九時二十分発のエア・ニッポン二一〇三便にて台北へ向かう。集合時刻は二時間前であるから、ほとんどが成田に前泊であった。関西方面からの参加者は、関西空港から午前十時発の日本アジア航空二一一便である。台北の西方約四十キロにある桃園国際空港に着陸したのは十二時頃、日本との時差は一時間である。真夏の日本からと

現代台湾宗教参観記（寺尾）

はいえ、亜熱帯の台湾はやはり暑い。温度計は摂氏三十六度を指していた。

空港で関西組と顔合わせをした後、マイクロバスで三峽鎮に向かう。三峽溪に架かる長福橋の前でバスを降り、屋台が並ぶ橋を徒歩で渡ると道教の祖師廟である（写真1）。この廟に祀られる清水祖師は、河南開封の人で本名を陳昭応といい、福建省安溪県の出身者は皆祖師として崇敬するという。廟は清朝乾隆三十四年（一七六九）に創建された後、道光十三年（一八三三）、光緒二十五年（一八九九）、そして民国三十六年（一九四七）と再建されてきた。特に民国三十六年からの再建では、李梅樹（一九〇二〜八三）が半生をかけて建物の石柱や石壁に彫刻を行い、見事である。柱の彫刻ばかりでなく、どの壁面も壁画ともいふべき彫刻が施されているが、一つひとつ施主の名前が刻まれており、いかに人びとの信仰が寄せられているか感じられる。観光客もさることながら、参詣の人も多い。建物の一角に参詣者がお供え用の



写真1

紙銭を自分で燃やすための窯があり、目を引いた。ちなみに、供物の果物は、参詣者が自分で洗って供え、その後持ち帰って皆で食べる。種が多く食べづらい物是不可であるという。

祖師廟を出て、日本統治時代に建てられたレンガ造りの商店が並ぶ老街を散策する。通りの中程にも、興隆宮という道教の寺院がある。こちらは天上聖母、いわゆる媽祖まそを祀っている。媽祖は航海・漁業の守護神として、福建省出身者が多い台湾では各地で広く信仰を集めているという。ここには、葬儀の時に燃やす紙製の家財道具があった。二階建ての邸宅や乗用車、パソコン、テレビ、タンス、洋服、宝石、携帯電話、果てはドルや円など、現世の物は何でも用意されている。燃やすことにより、その物は陽（生）から陰（死）の世界へと送られるという。

この後、板橋市の林本源園邸に向かう。乾隆四十三年（一七七八）福建省漳州から台湾に移住し、巨万の富を

築いた林氏が、道光二十七年（一八四七）から三代に亘って造営した大邸宅である。庭園を含む敷地面積は約一万三千坪、建築面積は約三千七百坪に及ぶ。台北県第二級古蹟として、一般に公開されている。夏のスクールがあり大変蒸し暑い中、建物を巡った。

この日の宿泊は、台北市街北部の丘の上にそびえる円山大飯店である。ここには日本統治時代に台湾神社があり、その跡に当初は迎賓館として建てられたという。ツインルームはスイートルームかと思うほどの広さであった。翌朝、ペランダからTAIPEI101（高さ五〇八メートル）を望む。新都心のこのビルは世界一の高さを誇り、観光スポットとして注目を集めている。台湾経済の発展を象徴するランドマークであろう。

八月二日 午前中は台北市内を巡る。先ず訪れたのは、儒教の孔子廟である。市内の富豪が土地を提供し、各界に寄付を募って建立されたが、現在は台北市政府の管轄

現代台湾宗教參觀記（寺尾）

であり、民国八十一年（一九九二）国家第三級古蹟に指定されている。建築は山東省曲阜の孔子廟を模範とし、福建省漳州及び泉州の孔子廟を模したという。中心となる大成殿は、清水祖師廟と同様、外観・内部共にきらびやかなものである（写真2）。建物の諸所には陶器による様々な装飾が施されているが、限られた時間の中で細部を楽しむ余裕もなかったので、売店で図録『台北孔子廟交趾陶之美』を購入した。日本の湯島聖堂の諸建築が黒一色であることを思うと、好対照である。

大成殿には、中央に孔子、左右に顔淵・孟子などの亜聖十二名、大成殿の左右に建てられた東廡と西廡には、孔子の弟子と歴代の賢人百五十四名を祀っている。また、大成殿の後ろにある崇聖祀にも、孔子の先祖や先聖の父兄十五名を祀る。祀り方は、日本の寺院において江戸時代の歴代將軍の位牌などに見られるような、装飾が施された位牌である。「昌聖王伯夏公神位」「先賢牧虔神位」というように、全て「神位」号である。道教寺院の様に



写真 2

参詣者が線香を供える香炉や、同様に灯明や供物を供える台も見当たらず、それらを販売する所もないようである。そういう意味で雑然とした賑やかな雰囲気ではなく、境内はどちらかといえば落ち着いている。そんな中で、夏休みの子供たちが、楽器を持って祭礼の練習に集まっていた。孔子の誕生日である九月二十八日は学校が休日となり、早朝五時から誕生を祝う祭礼が行われる。

孔子廟と通りを隔てた北側にある保安宮は、道教の寺院である。清水廟や龍山寺（後述）と共に、台北市の三大名刹に数えられている。医療の神である保生大帝を主神に祀っている。この神は、十世紀に実在した名医呉本で、福建省泉州府同安県の人である。きらびやかな建物は、嘉慶十年（一八〇五）に創建され、同治七年（一八六八）、民国八年（一九一九）と重修されたものであるという。入り口では、線香や灯明などのお参り用品一式をセツトにして販売しており、十ヶ所の香炉にそれぞれ線香をあげて参拝するように案内板がある。正面の三川

殿に天公炉、中央の正殿に保生大帝炉、右手の東護室に天上聖母殿、左手の西護室に註生娘娘殿、背後の後殿に神農殿・解祭壇・玄天殿・保恩堂、更にその後ろの後棟三楼に大雄宝殿、後棟四楼に凌霄宝殿となっている。解祭壇では、鶏肉・卵といった特別な供物も捧げられていた（写真3）。

次いで国立故宮博物院である。世界四大博物館の一つとして名高い本院は、清朝宮廷のコレクションを中心に六十五万余点を収蔵する。書道で必ず学ぶ書聖たち、東晋の王羲之（三〇三―六二）や唐の孫過庭（六四八頃―七〇三）、顔真卿（七〇九―八五）などの作品も、みな本院に所蔵される。一時間余りでは入り口に立ったに過ぎないが、致し方ない。ミュージアムショップで図録『妙華生花―故宮所蔵の書画と文献資料（日本語）』を購入し、次回の訪問に備えることにした。

昼食は、法鼓山の信徒が経営する市内のレストランで、精進料理をいただく。そして、台北から数十キロの距離

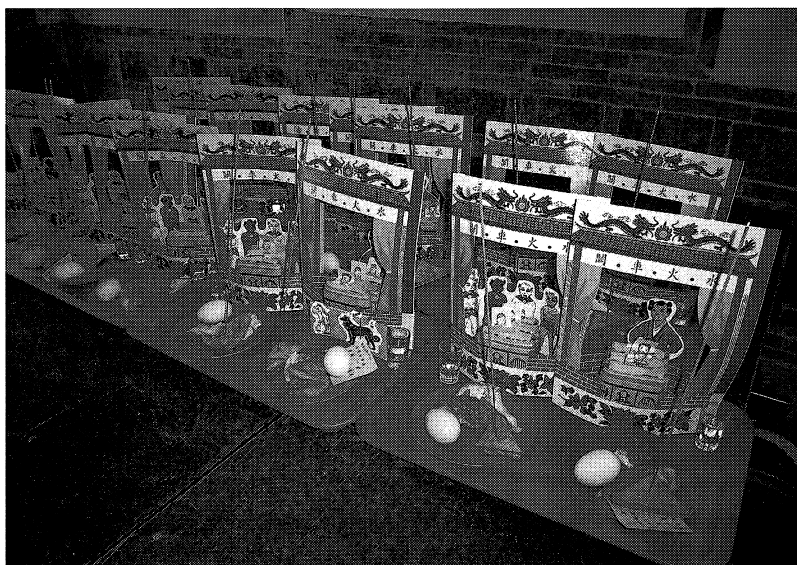


写真 3

にある金山郷三界村の法鼓山に向かう。この訪問は、今回の旅行の眼目の一つである。

法鼓山は現代台湾仏教を代表する大寺院の一つであり、日本におけるような宗派を形成しない台湾仏教においては、一つの教団であると言っても良い規模と組織もっている。現在、国内には台北市をはじめ台中市、台南市などに十の分院、五十余りの修行所、事務所、連絡拠点があり、海外にも米国ニューヨークの東初禅寺をはじめ北米に八、アジアに三、ヨーロッパに一、オーストラリアに二の分会或いは連絡所がある。本部である法鼓山には中華仏学研究所、僧尼養成の法鼓山僧伽大学、一般人の法鼓大学を擁し、台北市に中華仏教文化館、農禪寺などがある。日本の『大正新脩大藏経』第一巻、第五十五巻・第八十五巻及び『正統藏教』第一冊、第八十八冊をいち早く電子データ化して仏教研究に貢献している「電子仏典集成」を作成した中華電子仏典協会 (Chinese Buddhist Electronic Text Association 慧光 CBETA)

も、法鼓山による組織である。なお、中華電子仏典協会には、日本印度学仏教学会が中心となって組織し、先行して開始された大蔵経データベース事業である大蔵経テキストデータベース研究会(SAT)も、全面的に協力している。

創設者の聖嚴法師は、民国十九年(一九三〇)に江蘇省保康で生まれ、幼時に出家するも従軍。戦後、国共内戦のため民国三十八年(一九四九)に台湾に渡り、民国四十八年(一九五九)に東初老人について再出家する。

師の東初老人も、中国本土から民国三十八年に台湾へと渡った僧である。民国五十八年(一九六九)には立正大学に留学し、台湾の僧侶で初めて文学博士の学位を取得した。その後、米国で布教に従事するが、民国六十六年(一九七七)に師が入寂したため、台湾に帰って農禅寺と中華仏教文化館を継承する。民国七十八年(一九八九)には法鼓山を創設し、現在の大伽藍は民国九十四年(二〇〇五)に正式開山されている。ちなみに、法鼓山とい

う名称は、『法華経』化城喻品の「唯願天人尊 転無上法輪 撃于大法鼓 而吹大法螺 普雨大法雨 度無量衆生 我等咸帰請 当演深遠音」に由来する。

中国大陸の仏教は、宋代以降、禅と念仏が融合された禅宗として発展し、日本にも江戸時代に黄檗宗として伝わっている。法鼓山は、聖嚴法師や東初老人の履歴に明らかのように、戦後に大陸からもたらされた仏教が台湾で新たに展開した「漢伝仏教」である。基本的に出家主義であり、その点で現在の日本仏教の各宗とは異なっており、韓国の曹溪宗などと近いと思われる。

台湾仏教においては、沙弥(尼)になることができるのは六十歳までであり、その後二年間の修業を経て具足戒を受け沙門(尼)となる。ただし、具足戒を受けられるのは三十五歳まで(四十歳であった時期もある)である。法鼓山では、沙門(尼)となつて三十年で定年となり、寺院における様々な役割から解放されて自由な立場となる。年老いたり病氣となった僧尼は、看護組によつ

て看護される。看護組は、若い僧尼がそれぞれ一年間務めるという。

法鼓仏教研修学院校長である惠敏師の出迎えを受け、法鼓山の歩みの説明の後、図書館をはじめ山内の伽藍を見学した。山内に居住する僧尼は、学生も含めて二百名ほどであるという。民国九十五年（二〇〇六）に完成した大梵鐘は、日本の高岡市で鑄造したもので、梵鐘全面に『法華經』の全文が鑄込まれている。聖嚴法師と立正大学大学院で同学であった桐谷征一氏などが、開眼法要に出席されている（写真4）。惠敏師は東京大学に留学して文学博士の学位を取得しており、国立台北芸術大学教授、また中華仏学研究所の副所長でもあり、学者としても広く活躍されている。

翌日の出発まで、秀蘭さんが我々の世話役を務めてくれた。彼女は法鼓山の信徒で、日本に留学経験がある公立学校の教師であるという。休暇が取れるときに二日、三日、或いは数週間と、年に何度か法鼓山に来ては、ボ



写真4



ランティアとして様々な仕事をしているという。山内の多くの仕事は、このような在俗のボランティアによって担われており、滞在できる期間や能力により、その時々には様々なことを担当するという。ボランティアのための宿舎も整備されている。

宿泊は、山内にある外来研究者用ゲストルームが特別に用意されていた。日本のホテルのような部屋であった。宿泊できる部屋の中で、個々に冷房が完備された部屋はここだけであるとのこと、ありがたい。夕食は寺外のレストランに場所を移し、法鼓山による歓迎の晩餐会となった。恵敏師をはじめ主要な方々が出席され、台湾仏教について色々と話を聞くことができた。

八月三日 日の出前に起床し、五時四十五分から大雄宝殿で行われる坐禅に参加する（写真5）。秀蘭さんも滞在中は毎朝参禅すること、一般の信徒も多い。六時からは朝勤である。須弥壇には中央に釈尊、右に薬師

現代台湾宗教参観記（寺尾）



写真 5

現代台湾宗教参観記（寺尾）

如来、左に阿弥陀如来が祀られている。礼拝など、周囲の信徒の動作に合わせて行う。六時四十五分から、朝食である。もちろん精進料理である。惠敏師、さらに昨晚帰山したという果暉師を囲み、台湾仏教や法鼓山について話がはずんだ。果暉師は、立正大学に留学して文学博士の学位を取得し、亞洲大学の助理教授である。法鼓山では副住持の役職にあり、惠敏法師と同様に広く活躍されており、日本の学会でもしばしば研究発表されている（写真6）。

皆さんの見送りを受けて法鼓山を辞去し、午前中に台北市内に戻って国立台湾大学へと向かう。台湾大学は、日本統治時代の一九二八年に創立された台北帝国大学を前身とする。日本語文学系の林立萍副教授の出迎えを受け、図書館を見学する。林女史は名古屋大学に留学されて文学博士の学位を取得されており、日本語の語彙論を専門とされている。図書館の蔵書数は三〇〇万冊余り、台北帝大時代の各種調査研究資料をはじめ、台湾の人類

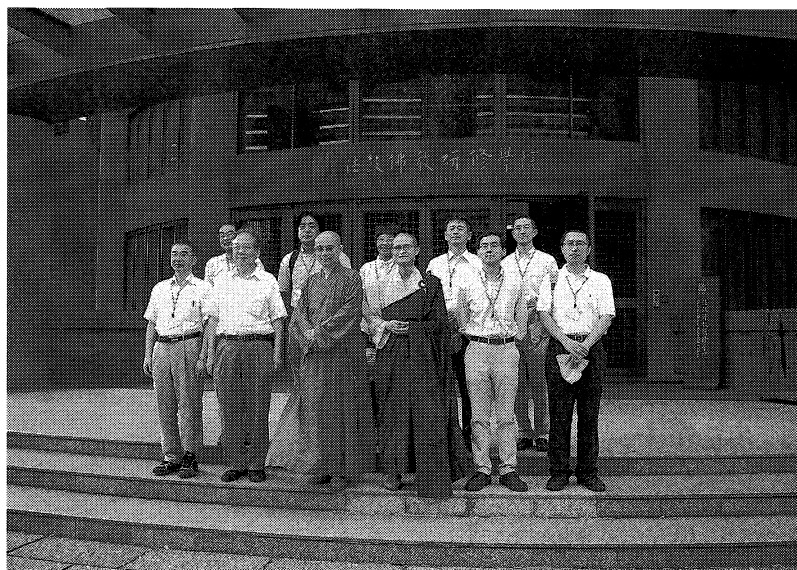


写真 6

学的研究の先駆者伊能嘉矩（一八六七～一九二五）の資料を収めた伊能文庫や台湾古拓碑等の貴重資料を所蔵する。貴重書室には、室町時代書写の『日本書紀』や絵巻物など日本の古典籍、清朝嘉慶元年（一七九六）の岸裡大社文書など台湾の古文書、その他古版本等を収蔵しており、特別に拝観することができた（写真7）。

午後は、仏光山台北道場を訪問した。仏光山は、法鼓山と同様に現代台湾仏教を代表する大寺院である。創始者の星雲大師は、民国十六年（一九二七）に中国本土で生まれ、国共内戦の影響で民国三十八年（一九四九）に台湾へ渡ってきた。そして民国五十六年（一九六七）に仏光山の第一步を、台湾第二の都市である高雄市の郊外に築く。現在、国内に四百八十、海外に百七十の支部等がある。僧尼養成の仏学院の他に、一般大学として仏光大学を設置している。

台北道場は十四階建ビルになっており、十四階の如来殿（本堂）、十二階の禪堂・齋堂をはじめ、美術館・放

現代台湾宗教参観記（寺尾）



写真7

現代台湾宗教參觀記（寺尾）

送スタジオや事務所、講義室など関係施設が網羅されている（二、四階、六階、七階は一般のオフィス等が入居）。如来殿には、須弥壇上の中央に毘盧舍那仏、右に宝生仏（南方）と阿閼仏（東方）、左に阿弥陀仏（西方）と不空成就仏（北方）を祀り、須弥壇に続く左右の壁には文殊・普賢菩薩が描かれる。その他、右脇壇には観世音菩薩が、左脇壇には地藏菩薩が祀られ、それぞれ祈願、故人の供養が行われる（写真8）。堂内の床面は、日蓮宗の本堂の様に経席などの仏具が種々置かれている訳ではなく、須弥壇前に若干の仏具が置かれているだけで、あとは広々とした空間となっている。これは法鼓山の大雄宝殿や、韓国海印寺の大雄宝殿なども同様であった。

法鼓山が学術研究に力を入れているとすれば、仏光山は文化活動に重点を置いているようである。ここでは、一般向けの文化講座を行っているが、その内容は多岐に渡っており、日本における新聞社主催のカルチャーセンターの様である。開講中の講座も覗かせてもらった。



写真 8

案内して頂いた妙月尼をはじめ、この道場にいる出家者は全て尼僧である。仏光山では、道場によって僧と尼が分かれており、台北は尼僧であるという。出家者は全部で千四百人位、この内尼僧が千百人、僧が三百人である。このように尼僧が増加したのは、ここ十年程位の傾向である。従前の台湾社会では、女性に高等教育は必要ないとされていたが、近年はむしろ教育が重要視されており、出家すると教育費用が掛からないため、女性の自己実現の一つとして出家する人もあるという。二十歳前後で出家し、大学卒業後、仏学院で仏教を専門的に研鑽する。四年間の学問研鑽が終了すると、自分の希望した場所で具体的な活動に就くが、三年（海外では五年から十年）で定期的に移動することである。

八月四日 法鼓山や仏光山は戦後新たに展開した現代仏教であったが、最終日に訪れた龍山寺は対照的に台北で最も古い寺院である。乾隆三年（一七三八）に着工し、

同五年に落成したという。数回の大改修の後、民国三十四年（一九四五）の空襲により大きな被害を受けたが、民国四十二年（一九五三）に再建修復された（写真9）。現在は委員会によって管理されており、案内パンフレットにも財団法人台北市艋舺龍山寺と記される。

堂宇は祖師廟や孔子廟、保安宮と軌を一にするきらびやかなものである。中央の円通宝殿には本尊の觀世音菩薩を祀るが、後殿には天上聖母（媽祖）、文昌帝君、閻聖帝君など、道教の諸神を祀っている。参拝者で賑わい、まさに庶民信仰の寺といった趣で、東京で言えば浅草観音や巢鴨のとげ抜き地藏、柴又帝釈天などの縁日を想起させる（写真10）。何かの縁日であろう、円通宝殿内では黒の道服を纏った大勢の信徒達によって法要が行われており、『阿弥陀經』が読誦されていた。ほとんどが女性のように、僧尼と思われる人物は見当たらなかった。境内の一角には、経本や信仰を勧める書籍などが多数置かれていたが、これらは全て無料の施本である。



写真 9



写真10

いよいよ帰国。桃園国際空港から、関東方面の参加者は午後三時十分発成田空港行きエア・ニッポン二二〇便、関西方面の参加者は午後四時四十分発関西空港行き日本アジア航空二二二便である。関西方面の参加者より一足先にホテルを出発して地下鉄で台北駅まで行き、リムジンバスで空港に向かう。予定通りのフライトで、天候にも恵まれた四日間であった。企画された蓑輪氏、そして法鼓山の方々には大変お世話になった。関係諸氏に改めて感謝の意を表したい。

#### 付記

本稿の執筆に際して、『法鼓山（日本語版）』、『仏光山台北道場導覽手冊』をはじめ各寺廟発行の案内書等を参照した。なお、台湾の現代仏教については、蓑輪顕量氏が「台湾における修行「仏七」と門派化の進む寺院―西蓮淨苑・慧日講堂・南普陀寺・靈巖山寺・仏光山―」（『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文

化』第二二号、平成十八年）、「台湾の現代仏教―拠点寺院の門派化とその存在形態―」（『パース仏教文化学』第二〇号、平成十八年）等の論考において詳論されており、参照されたい。